

欧州Inside 独、音楽でも一人勝ち 芸術にまで広がる南北格差

ベルリン支局 赤川省吾

2013/6/5 7:00 | 日本経済新聞 電子版

ドイツの作曲家リヒャルト・ワーグナーは、歌劇に愛国的な歌詞をちりばめて時の権力者を魅了してきた。バイエルン国王ルートヴィヒ2世がその才能を愛し、独裁者ヒトラーを引き寄せ、いまはメルケル独首相をとりこにする。文豪トーマス・マンが「ヨーロッパ的な精神にそぐわない」と喝破したほどだが、不思議なことに生誕200年の今年はドイツだけでなく、欧州全域の歌劇場やオーケストラが作品を相次いで取り上げる。その背景には、債務危機が芸術面にも影を落とし、クラシック音楽界でも南北格差が広がっているという事情がある。

ドイツ中部バイエルン州の小都市バイロイトは5月22日、時ならぬ観光ブームに沸いた。この日はワーグナーが生まれてから200年。いつもは夏の音楽祭シーズンに限って使う祝祭劇場を特別に開けたところ、記念コンサートを目当てに世界中から観客が集まった。

ホスト役となったのは保守系与党・キリスト教社会同盟（CSU）のゼーホーファー党首。正装して壇上に現れると一席ぶった。「ワーグナーは伝説と神話に包まれていた」「ワーグナーは（音楽活動の本拠地とした）バイエルン州と特別な関係にある」。人種差別主義者という暗部を持つワーグナーを「天才」と持ち上げ、郷土愛をむき出しにして地元バイエルンを褒めたたえる内容だったが、ドイツ人以外の観客も盛んに拍手を送った。



バイロイト祝祭劇場は、いつもは夏の音楽祭シーズンに限って使う

「ドイツのために剣をとれ」「ドイツの芸術は永遠なり」。そう出演者が歌うワーグナー作品は国粹主義と相性がいい。ノンフィクション小説を多く発表している歴史研究家ブリギッテ・ハーマンは著書「ヒトラーとバイロイト音楽祭」で、独裁者が「信徒が巡礼の旅に出かけるように」バイロイトを訪れたと表現した。独誌シュピーゲルは表紙にワーグナーをあしらった3月号で「ホロコーストと結びついた音楽」と指摘した。

にもかかわらず狂想曲はドイツ以外でも鳴り響く。ワーグナー指揮の第一人者であるバレンボイム氏は、ベルリン国立歌劇場管弦楽団を率いてロンドンで公演する。イタリアのミラノ・スカラ座やパリ、スイスなどの歌劇場もワーグナーの調べが席巻。欧州では音楽専門誌だけでなく、一般紙も特集を組む。

なぜ欧州各地でワーグナー・ブームが作られたのか。200周年の節目ということもあるが、「ワーグナーと政治のかかわりがむかしより弱くなった」とマックス・プランク研究所のスヴェン・オリバー・ミュラー主任は解説する。メディアはなおナチスとワーグナーの関係を繰り返し取り上げるが、戦後70年近くがすぎて劇場も観客もワーグナー作品への抵抗感が薄れた。

確かに客の入りはいい。あまり上演されない「妖精」などを演じたドイツ東部ライプチヒの歌劇場はチケットの販売が伸びた。同歌劇場で音楽を奏でるゲヴァントハウス管弦楽団の質の高さにも後押しされてチケットの平均単価も13年には33ユーロ（約4300円）と前年より7ユーロ上がった。出演する音楽家にとってもメリットは大きい。ワーグナー作品の主役や準役を射止めて成功すれば一気に上昇気流に乗ることができる。世界中の劇場を回るスター歌手になるチャンスでもある。

ブームの素地を作ったのはドイツ政府が資金面でクラシック音楽を支えたことが大きい。小都市にまで点在する劇場とオーケストラを税金で賄い、お金がかかるワーグナー作品が上演できる水準を維持してきた。緊縮策のなかでかつてに比べて予算は削られているものの、ベルリンでは歌劇や演劇、それにコンサートに対して1席あたり最大250ユーロの補助金が出ているといわれる。対抗できるような国は、同じドイツ語圏のオーストリアぐらいしか見あたらない。「ドイツ語圏がクラシック音楽界の流れを作りだしている」との認識はドイツ・オーストリアに共通する。

二匹目のドジョウを狙う作戦は始まっている。来年は第三帝国音楽院総裁に就いていたドイツの作曲家リヒャルト・シュトラウスが生誕150年を迎える。主要オーケストラの来シーズン（13年秋～14年夏）のプログラムを見ると、シュトラウス作品が目白押しだ。

ドイツ近世史と表裏一体の「2人のリヒャルト」を輸出するドイツの「一人勝ち」が鮮明になる一方で、長年にわたってクラシック界の頂点に君臨していたはずのイタリアは元気がない。今年はイタリアを代表する作曲家ヴェルディの生誕200年。ワーグナーをかすめるほどのブームになってもよさそうだが、景気後退と財政危機が重くのしかかる。

例えばフィレンツェでは劇場運営費を節約するため、指揮者の報酬が15%カットされたとオーストリア紙は報じた。ヴェルディ作品を演じる音楽祭でも演出などあらゆる面に経費節減の波が及び、「これではイタリアの名折れになる」と巨匠リッカルド・ムーティが嘆いたと伝わる。小さな劇場の経営が厳しく、イタリア出身のスター歌手チェチーリア・バルトリは独紙ツァイトに「もうドイツが（イタリア音楽界から）学べるものはほとんどない」と語るほど危機的な状況にまで追い込まれた。硬直的で閉鎖的な雇用形態が人材の流動性を阻み、活力をそいでいるとの指摘も多い。こうした状況を見ると今も昔も芸術は政治や経済と切り離せないことがわかる。

ただ多様性が欧州の魅力であり、特徴でもある。規則正しいライトモチーフ（示導動機）で縛るワーグナー音楽は、まるで規律を重視するドイツの財政政策のようだ。音楽の世界までドイツが突出する現状を好ましいと思っている劇場関係者はほとんどいない。ベルリンを本拠地に活動するバレンボイム氏は記者会見で語った。「もうワーグナーは十分だ。これからはヴェルディに力を入れたい」。南欧の改革と復活を望んでいるのは欧州中央銀行（ECB）と欧州委員会だけでない。だからこそ欧州から目が離せない。



主要オーケストラの多くが2013年はワーグナー、14年はシュトラウスを奏でる(写真はゲヴァントハウス管弦楽団が使う独ライプチヒ市のコンサートホール)

「欧州Inside」は原則毎週水曜日に掲載します。

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.